



想像する力

息子「多様性っていいことなんですよ？学校でそう教わったけど？」

母「うん」

息子「じゃあ、どうして多様性があるとややこしくなるの？」

母「多様性ってやつは物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えないし、そりゃないほうが楽よ」

息子「楽じゃないものが、どうしていいの？」

母「**楽ばっかりしていると、無知になるから**」

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』ブレイディみかこ 著 より



作家のブレイディみかこさんには、イギリス人の夫との間に一人息子がいます。その息子が通うイギリスの公立中学校で次々と起こる問題を、共に悩み・乗り越えていく日々を綴った本がYahoo! ニュース本屋大賞2019・ノンフィクション本大賞を受賞しました。

学校には東欧からの移民の子（裕福な家庭だが差別的な発言を繰り返す）や貧しい労働者階級の白人の子（移民に対して敵対心を持つ）など、多種多様な子どもたちが通っていました。そこに、イギリスで生まれ育った東洋人の顔を持つ息子が混じり、日々なにかしらの対立や衝突が起こります。



ある日みかこさんは、息子が学校で「エンパシー」について考える授業を受けたことを知ります。言葉の意味は「相手の立場に立って考えること」ですが、日本でよく使われる「共感；シンパシー」とは違う使われ方をします。

シンパシーのほうは、かわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持っている人々に対して人間が抱く感情のことだから、自分で努力をしなくても自然に出て来る。だが、エンパシーは違う。**自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうだとは思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力**のことだ。

「シンパシー」は放っておいても沸いてくるものですが、「エンパシー」は**分かち合おうとする努力をしないと身につかない「力」**だ、というのが興味深い点です。私たちは、自分と同じ意見や似たような境遇の人には共感しやすいですし、つい同情もしてしまいます。しかしそれは一方で、違う意見や異なる境遇の人との間に境界線を引く危険性をはらんでいます。

仏教に「凡夫（ぼんぶ）」という言葉があります。そして「凡夫」と翻訳される前のインドの原語には、「分け隔てる」という意味があるそうです。「自分と他者を分け隔てながら生きる者」が凡夫です。

人種差別や思想の対立・貧富の差や世代間対立など、さまざまな衝突が繰り返される現代社会において、「エンパシー」を磨くことの大切さを改めて思います。その出発点となるのは、自らの凡夫性（他者との境界線を引いてしまう私の姿）に気づくことではないでしょうか。